

# 油彩画における単色表現の役割に関する一考察

桶田 洋明 [鹿児島大学教育学系 (美術教育)]

堀之内 聖 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

A study of the role of monochromatic expression in oil paintings

OKEDA Hiroaki and HORINOUCI Satoshi

キーワード：油彩画、絵画、単色、グリザイユ、美術教育

## 1. はじめに

絵画表現において、絵画の造形要素は密接な関係があり、絵画の様式や表現内容等によって必要な要素は差異が生じる。具象的絵画では、対象となる事象の正確な再現描写が求められるため、それらの表現に必要な要素である、形体、空間、色彩等の表現が造形要素として該当する。形体と空間の表現においては、対象物の正確な形体描写とともに立体感を表現することで、三次元的な空間表現の表出が可能となる。これらの表現を習得するための訓練としては、鉛筆や木炭等によるデッサンやクロッキーが一般的には挙げられる。デッサンのように、無彩色だけで形体や空間表現を行うことは、有彩色による色彩の検討が不必要となるため、明暗表現のみに集中して練習することができる。しかし絵具等を用いた、有彩色を含めた明暗表現の場合、彩度や色相の変化も考慮する必要があるため、単純な明度変化のみで表現するデッサン等とは異なり、難易度は高くなる。一方で、絵具等による表現でも、無彩色または単色を中心とした描写の場合は、デッサン的な色彩の検討のみとなるため、比較的平易に着彩をすることができる。西洋絵画の歴史を辿ると、単色で描かれた作品は散見することができる。それらは習作的用途のものから祭壇画の一場面、制作過程の一部としての描画等、様々な目的で作られている。

本研究では、単色による表現の絵画作品の特質について検証し、単色表現がもたらす意義を導き出していく。その後、教員養成学部美術系の学生による実制作をもとに考察を深め、単色表現の効果について列挙する。なお、本研究で扱う主たる色材は油絵具とする。油絵具はルネサンス以降の西洋絵画において代表的な色材であり、現代でも地域を問わず用いられている。加えて学校現場においても、中学校の一部や多くの高等学校で導入しているため、本研究にて新たな色彩表現や描画技法を提案することは、油彩画指導の一助となるはずである。

## 2. 単色表現の種類と効果

### 2.1. 単色表現の種類

「単色」(モノクローム・monochrome)の意味は2つあり、ひとつは、一色のみで、他の色が混ざ

っていない色のこと、もうひとつは、プリズムで太陽光線を分光したときの七原色の一つ一つの色となっている。本研究においては前者の意味が該当する。例えば、赤色のみの明度対比で描かれた作品は単色表現によるものとなる。絵画における単色表現としてまず想起するものは、グリザイユであろう。グリザイユは灰色画のことであり、無彩色のみのグラデーションで描かれた作品のことである。他に類似する表現で茶系や緑系の明度対比で描かれたものも存在する<sup>(1)</sup>。

単色表現による絵画を検証すると、目的の異なる複数のタイプに分類することができる。ひとつは、描写するモチーフそのものが単色であるため、結果的に単色表現になっているタイプである。例えば、彫刻を模した絵画作品はグリザイユによる表現になっているものが多い。もうひとつは、絵画様式の特徴が単色表現的になっているものである。これらの代表的な様式としては、バロック期の絵画作品が挙げられる。さらにもうひとつ、制作過程における単色表現の利用も加えたい。これは制作初期に単色で表現し、その後、他の有彩色を用いて完成させる技法である。以上3つの単色表現については、次章にて詳細を述べていく。

絵画における単色表現技法として知名度が高いものは、グリザイユであろう。グリザイユはカマイユの一種である。次節ではこれらに関してもう少し考察しておく。

## 2.2. カマイユの種類と類語

カマイユ (camaïeu) は、フランス語で単色画を意味し、語源はギリシア語で低い起伏を意味するカマイ (kamai) に由来し、さらにイタリア語で貝殻に浮彫を施したカメオ (cameo) からきているとされ、広義では単色の絵具によって明暗の調子を描く技法および絵画のことを指す。狭義では褐色系の土系顔料による調子だけで描く単色画とされるが、全ての単色画の総称として呼ばれることが多い。その中でも、灰色の調子だけで仕上げたカマイユをグリザイユ (grisaille)、緑土色であればヴェルダイユ (verdaille)、さらに黄褐色系をシラージュ (cirage) と呼んでいる。しかし今日では、グリザイユ以外の言葉はほとんど用いられていない<sup>(2)</sup>。

グリザイユ、カマイユのほかにも類似した意味を持つ用語が複数存在する。キアロスクーロ (Chiaroscuro) はイタリア語で明暗という意味であり、美術では明部・暗部の対比やその変化をとらえて立体感を表現する技法である。元は明暗で描くデッサンをキアロスクーロ素描と呼んでいたが、17世紀バロック期の絵画において、キアロスクーロによる立体感あふれる作品が見られるようになった。画面に描かれるモチーフの明部と暗部を強調し、立体感とともに構成上の劇的な効果の表出をめざして用いられている。「明暗法」、「陰影法」もキアロスクーロと同義語である。テネブリズム (Tenebrism) は明暗法をさらに高めた様式として存在する。キアロスクーロは明暗の対比による表現であるため、結果的に単色に近い色調になる。特に用いられた色調は褐色系であるため、カマイユの用語ではシラージュが当てはまる。他にはエボーシュ (ébauche) という用語もあるが、これはフランス語で下描き・下絵を指す。下描き段階であるため単色表現が中心となり、特に多く用いられる色調はキアロスクーロ同様に褐色系である。アンダーペインティング (underpainting) も単色による下描き表現の意味だが、単色による明暗描写を下層で行い、上層は有彩色を用いて完成さ

せる工程が一般的である。よってアンダーペインティングとしての単色は無彩色を含め、さまざまな色調が選択されている。

以上、カマイユを中心に、単色表現に該当する技法名について検証した。次章では 2.1. で述べたように、カマイユを中心とした単色表現における目的別の 3 種について考察していく。

### 3. 単色表現の実際

#### 3.1. 単色モチーフのための表現

前章にて記述した通り、単色モチーフとしては彫刻が代表的であり、これらを模した絵画作品は古くから存在する。その中でも祭壇画の扉部分の表側に砂岩彫刻を模した像は多く見ることができ、グリザイユまたはシラージュで描かれたその描写はリアルで迫真的である。その有名な作品のひとつにファン・エイク兄弟 (Hubert van Eyck, Jan van Eyck) による《ヘントの祭壇画》(図 1)がある。本作品の扉の表側下段に、洗礼者ヨハネと福音書記者ヨハネがグリザイユで彫像的に描かれている。その他、ジョット (Giotto di Bondone) が描いた、スクロヴェーニ礼拝堂フレスコ画の下列や、ハンス・メムリンク (Hans Memling) の三連祭壇画の一部にも、同様の表現が見てとれる。またシスティーナ礼拝堂の、ミケランジェロ (Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni) による天井フレスコ画の一部もグリザイユで描かれている。これらについて、宗教的コンセプト等については言及せず、絵画表現に密接な色彩や構成、空間表現等を中心に検証すると、極めて高度な技術で表現されていることが理解できる。特にフレスコ画の場合、本物の彫刻作品も壁面に設置される環境の間に存在することがあるため、絵画の中の彫刻も、あたかも本物であるかのようにリアルに表現する必要がある。そのためには的確な明暗描写からなる立体感とともに、他の絵画の部分に

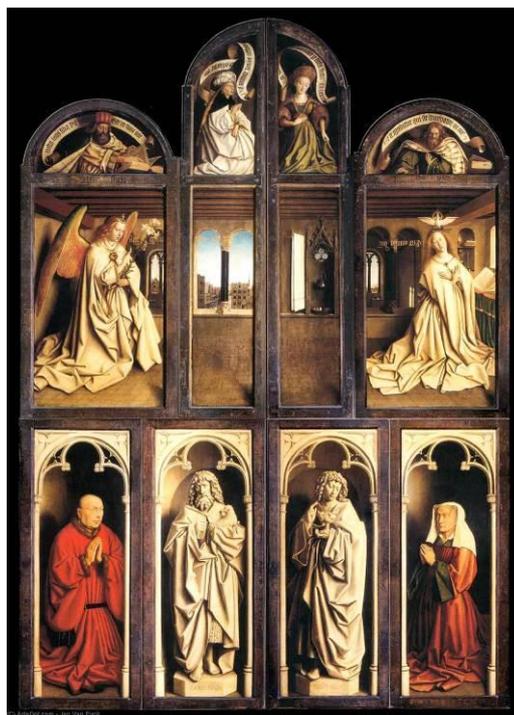


図 1 《ヘントの祭壇画》扉部分の表側

ファン・エイク兄弟 1432 年

見られる色調に合致した単色を用いて描くことが必要となる。ゆえにこれら多くの単色モチーフは純粋な無彩色のみの色調ではなく、有彩色を僅かに加えた単色による表現となっているものが多い。

### 3.2. 単色的傾向の強い様式

西洋絵画の様式において単色的傾向が強い時代としては、ルネサンス以降印象主義の前までが当てはまるが、特にバロック期の作品が顕著であろう。詳細をみると、地域によって表現方法は微妙に異なるが、キアロスクーロによる明暗を誇張した表現とともに、褐色系の立体感あふれる作品が見られるようになった。画面に描かれるモチーフの明部と暗部を強調し、立体感とともに構成上の劇的な効果の表出をめざして用いられている。明暗のコントラストを強調することで強い立体感を生み出すことを目的とするため、明部は白色、暗部は黒色に近くなり、おのずと彩度の高い有彩色の箇所は少なくなる。バロック期の画家のひとり、ルーベンス (Peter Paul Rubens) は比較的彩度の高い色彩を用いた作品を描いているが、制作過程をみると他の同時期の画家と類似していることがわかる。キャンバスまたはパネルに褐色の有色下地を施し、明部を中心に不透明色を置き、暗部は最小限の加色として、褐色の下地を生かした表現を行なっている。特に図2の作品は薄塗で描かれているため、下層の下地を確認することができる<sup>(3)</sup>。

### 3.3. 制作過程における単色の利用

本技法は、制作初期に単色で明暗表現した後、上層を他の有彩色を半透明または不透明に施して完成させるものである。明度対比を下層で行い、色相・彩度対比を上層で行う、言い換えれば作業の二重構造によって作られる作品が該当する。しかしながら、本技法で描く現代画家は見られるが、過去の巨匠で、明確に用いている作品はほとんど確認できていないのが現状である。前項で述べた

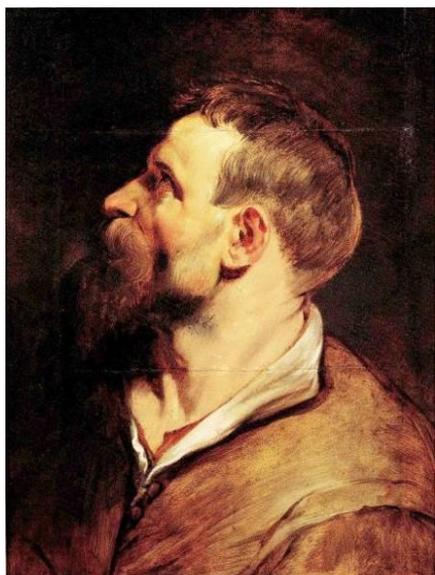


図2 《顎髭のある男の横顔》ピーテル・パウル・ルーベンス 1577年

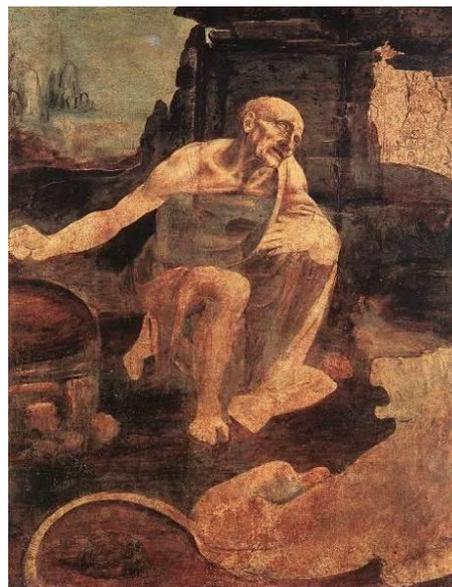


図3 《荒野の聖ヒエロニムス》レオナルド・ダ・ヴィンチ 1480年頃

バロック期の作品はこの技法に類似点があるが、明度対比と色相・彩度対比を分割して進めるという意図は見受けられず、明部の色などは有彩色を含む不透明色で塗布されており、アラプリマ的要素が強い。レオナルド・ダ・ヴィンチの作品は未完成のものが多く存在するが、それらを検証しても本技法のプロセスは確認できない。図3の作品では未完成の箇所には褐色による明暗描写が見られるが、明度対比による表現というよりも、モチーフの輪郭線にわずかな陰影を施した、いわゆるアンダーローイング的要素が強い。当然ながら、作品の資料・エスキースとしてのデッサンやスケッチは単色であり、多数存在する。作品制作ではそれらを基に、形体と陰影の描写を行なっている。つまり、一枚の作品で単色と彩色の二重構造は見られないが、複数の画面でそれらは結果的に行われていると言える。

以上、本章では3種の単色表現について検証した。次章では単色を用いた試作品を基に、単色表現の利点について考察していく。

#### 4. 単色表現の実践

##### 4.1. 二重構造による表現

本節では、制作初期に単色で明暗表現し、その後上層を一部の有彩色を半透明または不透明に施して完成する技法を、試作品の制作（図4～6、制作者・堀之内）をふまえて検証していく。

制作初期の明暗表現として、主にバーントアンバー、ウルトラマリンブルー、パーマネントホワイトの3色を主としたカマイユで描写している（図4）。この3色により、グリザイユによる灰色のみの明暗描写とは異なり、明暗の中に寒色と暖色をわずかに表現することができるため、より複雑な明暗描写が可能となる。この段階の描画法としては、バロック期の作品に見られる明部を中心とした厚塗りをとり入れ、隣り合う絵具層の隙間を空けて置いている。これらによって、第2段階の絵具層が不規則に隙間に溜まる偶然の効果を狙ったものである。また、明部のうち特にハイライト

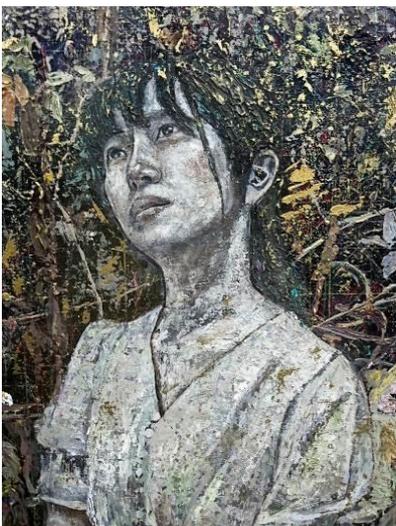


図4 3色のカマイユによる試作

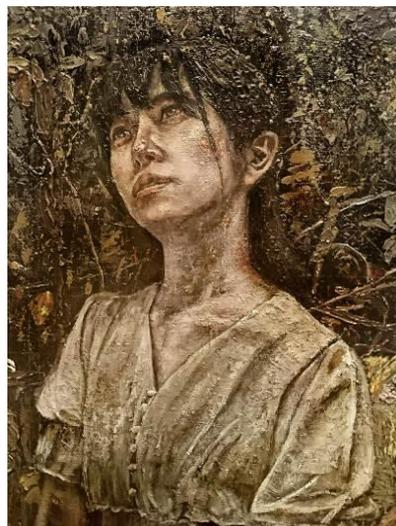


図5 3色のカマイユによる試作

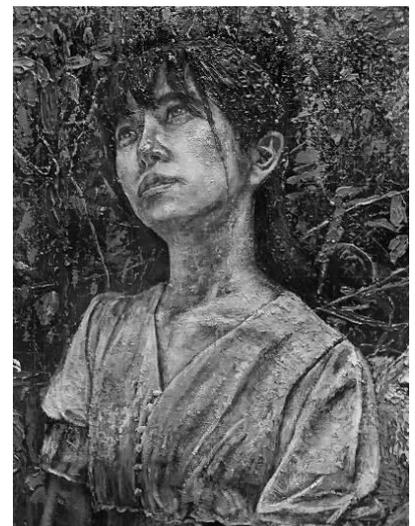


図6 3色のカマイユによる試作

となる部分にフェルメールが用いたポワンティエ (Pointillé 点綴法：てんていほう) のように厚めの点描を加えることによって、輝く光を表現している。一方で、背景の描写においてはモチーフ別に少量の固有色を加えてモデリングをしている。

その後、第2段階として画面全体に統一感を与えるためにローアンバーとウルトラマリンブルーを混色した絵具によるグレイズを施し、部分的にふき取り調子を整える。乾燥後、明部を中心に若干明度の高い固有色を豚毛によるドライブラシで置いている。これは、隙間から下層を透かして絵具層の累積を見せるための工程である。最終層では、ローアンバー等による色を用いたグレイズで深みを与え、一部明部を描写し完成とした (図5)。このように、下層における3色によるカマイユが、完成のイメージに近い明暗表現を生み出し、上層への過程に効率良くつなげる要因となった。また、明暗描写と同時に取り入れた複雑なマチエールが、上層の固有色に深みを与える効果があることも確認できる。

図5の状態の作品を撮影し、PCソフトで有彩色を取り除いたものが図6である。肌の部分における明度差のグラデーションは、きわめてなめらかであり、また図4の3色によるカマイユと同様の諧調表現になっている。背景も同様にカマイユの効果が見てとれる。これらは、第1段階で施したカマイユによる明暗表現を維持したまま有彩色を置くことができていることを証明している。

#### 4.2. 複数画面による検証

本節では、単色表現を一枚の油彩画作品で実施後、有彩色を含めた全色を用いた作品を描き、各々の学生の達成度・上達度を検証している。本学の教育学部美術専修学生を対象に授業の課題として実施したものであり、毎年ほぼ同様の課題内容で制作を行なっている。本課題は、油彩画制作初心者に対するものであり、まず1枚目は明暗だけで描画するためにグリザイユによる表現で完成する作品としている。グリザイユで表現することにより、有彩色によるヴァールール＝色相・彩度・明度のバランスを考慮する必要がないため、デッサンのような明暗表現でのみ完成させることができ、油絵具の粘性や透明性、溶き油の性質・特性に慣れる時間として充てることができる。また、グリザイユによる制作途中で黒～灰色によるグレイズも施している。これにより、半透明の透層による効果や下層と上層の関係性についても学んでいく。2枚目の作品制作は自由に色を使い、1枚目で学んだ明暗描写を有彩色に置き換えて表現していく。初心者は2枚目の序盤にてバーントアンバー、ウルトラマリンブルー、パーマネントホワイトの3色で明暗描写した後、他の有彩色を徐々に取り入れて完成させる。

図7～8の学生Aの作品はグリザイユによる1枚目 (図7) の後、2枚目は3色による描画ののち、他の有彩色を透層気味に表現する、いわゆる二重構造による工程で制作している (図8)。その結果、2枚目の作品の色調は破綻がなく、調和のとれたものとなっている。学生Bの作品 (図9～10) も学生Aと同様に、2枚目は3色による描画ののち、他の有彩色で透層を行っている (図10)。人形の服は紫色の固有色であり、他のモチーフとの協調が容易ではないが、正確なヴァールールの色彩表現が見られ、良作となっている。学生A、Bともに普段の制作では色彩による破綻が見られる作品が多か

ったが、グリザイユによる表現を経験した後は、落ち着いた色調を作り出すことができるようになった。また描画の二重構造や重色による表現を理解することで、上層からわずかに透過して見える色調の箇所を効果的に生み出す術も身につけることができた。

図 11～図 14 の学生 C の作品は人物作品を含め 4 作品の変化を見ることができる。カリキュラムの関係で学生 C は 1 枚目に人物のグリザイユ的表現による描画で制作している (図 11)。通常は静物画からスタートするが、本学生は人物画からのスタートとなったため、グリザイユ的・つまりバートアンバー、ウルトラマリンプルー、パーマネントホワイトの 3 色での表現で完成させる課題を行なった。もともと立体表現が得意ではないため当初は油絵具の扱いに戸惑っていたが、落ち着いた色調で 1 枚目を完成させることができた。人物自由描写の 2 枚目はやや色調の構成にバランスを欠き、特に肌や服の彩度が強すぎた状態で終了となっている (図 12)。3 枚目のグリザイユで油彩画による明度変化のポイントについて理解を深め (図 13)、4 枚目の静物自由描写では彩度の異なる静物モチーフを見事にまとめ、調和のとれた色調で完成することができている (図 14)。



図 7 学生 A グリザイユ



図 8 学生 A 自由描写



図 9 学生 B グリザイユ



図 10 学生 B 自由描写

油彩画の場合、油絵具・溶き油の特性等、取扱いに慣れることから始まり、さらに油絵具の可塑性、粘性の高さ、透明度の高さ等を生かした描画技法を学ぶ必要がある。最初はこれらの習得に重点を置くために使用する色数を制限し、グリザイユをはじめとした単色表現で描くことで効率の高い技法習得が可能となる。加えて、単色表現と他の有彩色との二重構造による描画技法を習得することで、油絵具の特性のひとつである透明度の高さを生かした、透過混合による色彩表現の理解も深めることができる。

## 5. おわりに

単色による描画の役割は、デッサン等の延長線上にある、油彩画による描画に取り入れることで



図 11 学生 C 人物グリザイユ



図 12 学生 C 人物自由描写



図 13 学生 C グリザイユ



図 14 学生 C 自由描写

油絵具等における特性の理解促進と、下層に用いることで上層の有彩色を効果的に明度・彩度・色相変化を生み出すことである。油彩画にとってこの両者は重要な役割であり、粘性や透明性等、油絵具の性質を生かした描画技法であると言える。油彩画制作の初歩においては特に有益な技法であり、少なくとも一度はカマイユ・グリザイユを代表とした単色による描画を勧めたい。一方で、色面の構成や色相変化による絵を描く人にとっての有益度は不明確である。今後は色相変化の描画と単色表現との相関についても研究を深めていきたい。

#### 参考文献

- (1) 今泉篤男、山田智三郎編、『西洋美術辞典』、東京堂出版、1954
- (2) 森田恒之監修・著、『絵画表現のしくみ』、美術出版社、2000、p.189
- (3) Colin Hayes 著・北村孝一訳、『絵画の材料と技法』、株式会社マール社、1980